

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	セト呪詛板の本文テキスト構造分析
Author(s)	前野, 弘志
Citation	史学研究 , 301 : 1 - 25
Issue Date	2018-10-12
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055645
Right	
Relation	



セト呪詛板の本文テキスト構造分析

前野 弘志

はじめに

いわゆる「セト呪詛板」*Sethianorum Tabellae*とは、400年頃のローマ市郊外で作成された一群の呪詛板のことである⁽¹⁾。その最初の包括的な史料集を出版したWünsch [1898]によれば、板に描かれた主要な図像はロバの姿をした救済者としてのセトであり、これらを作成したのはグノーシスの一派であるセト派であると結論した。しかし Preisendanz [1926]はその説を否定し、それ以来、その図像は戦車レースの勝敗を支配する「馬頭の神」と考えられている⁽²⁾。筆者はセト呪詛板の概要、図像、挿入定型句については既に別の機会に論じたので⁽³⁾、小論ではセト呪詛板の本文テキストの構造を分析する。

セト呪詛板は、①図像、②挿入定型句、③本文テキストの三つの要素で成り立っている。本文テキストとは、神霊を呼び出して呪詛の標的に対する罰を命令する文章のことであり、呪詛テキストの主要部分を指す。挿入定型句もテキストではあるが、これは決まり切った短い文言であり、呪詛板上の決まった場所に配置され、意味的には本文テキストや図像と関連しているが、文章としては独立しているので、小論では取り上げない。

小論で取り上げるのは、セト呪詛板の代表として、ST16の表面に書かれたテキスト1と裏面に書かれたテキスト2、およびST21の表面に書かれたテキスト1、テキスト2、テキスト3、テキスト4である。これらを選択した理由は、まずST16の表面には呪詛板図像の代名詞とも言える有名な半人半獣の絵が描かれており、また呪詛の標的は一個人であり、馭者に対する呪詛が多いセト呪詛板の中にあって、そうではない人物を標的としたものとして特徴的だからである。一方ST21は戦車レースの馭者と馬に対する呪詛であり、内容的にはセト呪詛板の典型例である。これら二枚の呪詛板は、図像の構図、挿入定型句の位置と内容、本文テキストの段落構成において、基本的に同じである。

小論が目指すのは、単なる本文テキストの訳出ではなく、正確な訳出を行うために、本文テキストの構造を明らかにすることにある。方法として、各テキストの構成要素をグリッド上に並べて比較する。これらの構成要素はモジュールのようなもので、ある程度の移動が見られる。移動とは、書き手が書き忘れた文章を後から書

き足したり、書き忘れたままにして生じるものである。呪詛テキストは型にはまり、繰り返しが多いため、このような間違いが生じやすかったのだろう。この移動を修復しないまま、本文テキストを素直に読むと、本来意図されたのとは異なる文章になってしまう。本来意図されたテキスト、その背景にある宗教思想を復元するためには、まず本文テキストの構造を知る必要がある。このようなテキスト分析は、管見の限りでは、他に見当たらない。

第一章 ST16の本文テキスト構造分析（表1）

ST16は、呪詛板図像のマスターピースともいえる馬頭の神の絵が描かれた有名なものである（図像はゲイジャー [2015] 75頁）。この呪詛板は、表面（A）にその図像と本文テキストが、裏面（B）には本文テキストだけが書かれている。表面の本文テキストをテキスト1（T1）、裏面の本文テキストをテキスト2（T2）と呼ぶこととする。また表1に掲げた個々の文章に言及する際には、表上部のテキスト番号（T1とT2）と表左側の列番号1から11までの組み合わせで番地を示すこととする（例えば、T1/1, T2/11など）。これらのテキストは、一行ごとに文字が上下逆さまに書かれている。つまり書き手は、一行ごとに呪詛板を180度回転させながら文章を書いたのである。この回転ないし循環は、セト呪詛板の核心的な宗教思想である。

本文テキストは神霊に宛てた書簡の形式をとっており、それは五つの要素からなる。①まず冒頭に書簡の表題として「令状」と書かれる。②次に神霊を召喚するために「～よ」と呼びかけ、③出現した神霊に対して「（我は）厳命す」と宣言し、④その具体的な内容として「～せよ」と命じる。この召喚・厳命・内容は基本的に三回繰り返される。つまり三つの段落が形成されることになる。（ア）最初の段落は呪詛者が呪詛板を置いた場所にいる神々に対する命令、（イ）第二の段落は呪詛板に描かれた神々に対する命令、（ウ）最後の段落は両方の神々に対する命令である。ただし召喚と厳命は融合することがある。⑤そして最後に「早く早く」という督促で結ばれる。T1とT2を比較すると、基本的な構造が同じであることが分かる。ただし多少の乱れはある。特にT2に乱れが顕著であるが、T1と比較すると本来意図されていた構造が復元できる。逆にT2がT1の理解を助けることもある。両テキストを相互補完的に読む必要がある。

（1）表題

T1/1の試訳：「令状」。セト呪詛板は原則、Λόγοςで始まる。ただしT2/1にはこの語がない。おそらく省略されたのだろう。省略や書き忘れはよくある。この単語は実際にはΛの中にοを書き込む合字になっており、γοςは書かれない。文字というよりむしろ記号化している。この単語には実に多くの意味があり、基本的には話

された「言葉」を指すが、ここでは「令状」と訳した。その理由は、本文が様々な神々に対する「～せよ」という命令のオンパレードだからである。もし「～して下さい」と訳すなら、「嘆願書」と訳してもいいだろう。つまりこの語は、神々に宛てたこの書簡の表題の役割を果たしており、それ故、本文テキストの始まりを示す目印でもある⁽⁴⁾。

(2) 段落 1

この段落は、呪詛者が呪詛板を置いた場所にいる神々に対する命令である。この段落には召喚、厳命、内容の三要素が含まれる。

1) 召喚

T1/2 の試訳：「汝ら、水の神よ、泉の神よ、(死者たちの) 女王よ、(汝らの隠された本当の名は) ネオイエ・カトイクーセ (なり)」。T1/2 と T2/2 は、呪文がわずかに違うだけで、他はほぼ同じである。ὕμις (= ὑμεῖς) 「汝ら」の呼格。

δέε Φρυγία 「フリュギア神よ」。綴りは Φρυγία⁽⁵⁾ と Φουδρια⁽⁶⁾ がある。Wünsch はどちらも Deus Ephydrias の呼格と解釈している (Wünsch [1898], S.120)。ἑφδριάς は「水の」という意味なので、文字通りは「水の神」という意味になるが、Wünsch はオシリスの別名と考えている (Wünsch [1898], S.86)。一方 Preisendanz は δέε をラテン語の deae 「女神たちよ」と捉え、「フリュギア」を乾燥をもたらすローカルな女神と考えた (Preisendanz [1926], S.32; Gager [1992], p.70, note 93)。しかし呪詛板が水のある場所に投げ込まれる習慣があったことを考えると、「水の神よ」と訳するのが良いように思われる。

δέε Νυφεε 「ニユムファイオス神よ」。文頭では δέε 「神」の呼格を冠して Νυμφεε⁽⁷⁾、Νυμφε⁽⁸⁾、Νυφεε⁽⁹⁾、Νυμφεαι⁽¹⁰⁾ (ε と αι は同じ読みだったのだろう) がある。これらを Wünsch は Deus Nymphaeus の呼格としている (Wünsch [1898], S.121)。νυμφαῖος は「ニユンフェーの」という意味で、ニユンフェーは泉に住む精であり、美しい少女の姿をしている (高津 [1960] ニユムペー、182頁)。Wünsch はこれもオシリスの別名と考えている (Wünsch [1898], S.86)。しかし上記した呪詛板と水の間接な関係を考えれば、「泉の神よ」と訳するのが相応しいだろう。

Ειδωνεα 「エイドーネアよ」。綴りは Ειδωνεα⁽¹¹⁾、Ειδωεα⁽¹²⁾ 系と Αιδωναι⁽¹³⁾、Αειδωναι⁽¹⁴⁾、Αιδωνεα⁽¹⁵⁾ 系に大別される。Wünsch はこれを Aidoneus-Adonai とした (Wünsch [1898], S.120)。Adonai はグノーシスや魔術で重要な天使的な存在で、名前は『旧約聖書』に由来し、「我が主」を意味するが、ローマ帝政期にはその意味が忘れられたまま使われていた (GMP [1992], p.331)。Adoniaios は Adonai の別読みであり、語尾がギリシア語的になったもので、『魔術パピルス』においては、「我が主」というエピセットではなく、神の名前として書かれた (GMP [1992], p.331)。

また Aidoneus (Αἰδωνεύς) は冥府の王ハデスの別名である (DNP [1996] Bd.1, Aidoneus, Kol.312)。また「(死者たちの) 女王 αἰδωναία」(PGM IV, 2855) というエピソードを持つヘカテー Έκάτηを指すのかも知れない (Gager [1992], p.70, note 95)。ヘカテーは、〈死者の霊の支配者であり、死者の霊を使って魔術を行うとされる。前古典期には人間にあらゆる恵みをもたらす神として少女の姿で描かれたが、古典期以降、特に古代末期においては魔術の女神とされ、姿も恐ろしく描かれるようになった。地下に下った少女としてペルセポネーと同一視されることもある。また入り口や公的・私的を問わず境界となる場所の番人ともされ、三叉路に彼女の像が置かれ食事が供えられた〉(DNP [1998] Bd.5, Hekate, Kol.267-270; 高津 [1960] ヘカテー, 227頁)。語形が女性形に見えること、また呪詛板が墓に収められる習慣があり、実際にこの呪詛板が棺から発見されたことを考え合わせると、ヘカテーを指して「(死者たちの) 女王よ」と詠すのが良いように思われる。

T1/2 の呪文は νεοιε κατοικουσε 「ネオイエ・カトイクーセ」である。この呪文には様々なバージョンがあるので、ひっくるめて「ネアエンコーロー呪文」と呼ぶこととする。これを Wunsch は不思議な呪文と捉えたが、Preisendanz は en chôrô katoikysai (ἐν χώρῳ κατοικοῦσαι) というギリシア語が崩れて呪文のようになったものと解釈し、die ihr hier am Orte wohnt と訳した (Preisendanz [1933], S.33)。Gager もその説を踏襲して、who live in this place と訳している (Gager [1992], p.70, note 96)。つまり日本語にすると「この場所に住むところの」(分詞の女性複数主格)となる。κατοικίζω の訳は、厳密には「住ませる」である。ではどの神のことを指しているのか。オリジナルと思われる文章を復元すると「汝ら、水の神よ、泉の神よ、死者たちの女王よ、この場所に住ませるところの」となり、呪詛者が井戸・泉・川・沼・洞窟や、墓地や、戸口・境界・三叉路で、その場所に設置された(つまり「住まわされた」)像・祠・棺などを前にして呼びかけている様が想像される。

T2/2 の呪文は νεοικουσε κατοικουσε 「ネオイクーセ・カトイクーセ」である。後半の「カトイクーセ」は Preisendanz が既に解釈した。前半の「ネオイクーセ」の「オイクーセ」も同じだろう。では νε「ネ」とは何か。これはもししかしたら本来は εν「エン」だったのではないだろうか。そうすると ενοικουσε (ἐνοικέω「住む」の分詞)となり、「(ここに) 住むところの (神々)」となる。

ところで、元はそのようなギリシア語であったとして、それが崩れて呪文のようになったのだろうか。あるいは逆に、呪文を作るために文章をわざと崩したのだろうか(著者には後者のように思えてならない)。いずれにせよ、呪文の元の意味が判明したとしても、それを訳文に反映させることは、呪文の機能を見失うことになってしまう。例えば Bevilacqua は、次のように訳している。Voi, infernali Ninfe Ephyriades che abitate in questo luogo 「汝ら、死者たちよ、ニンフェよ、エフユドリアデスよ、この場所に住むところの」(Bevilacqua [2012], p.608)。この訳文の意

味はすっきりしているが、呪文がないので、これらの神々が召喚された理由が分からなくなってしまう。呪文は本来、神々の隠された本当の名前とされ、それを唱えられた神々は、それを唱えた人間に服従しなければならない掟があるとされた。つまり呪文は神々に対する殺し文句である。それならば、呪文は呪文のままにしておくべきだろう。

2) 嚴命

T2/3 の試訳：「(我は) 汝らに嚴命す、汝らの力によって、そして汝らの聖なる死者たちによって」。ἐξορκίζω (= ἐξορκόω) の意味は「誓わせる」である⁽¹⁶⁾。従って強い命令として「(我は) 汝らに嚴命す」と訳した。ὀρκίζω「誓わせる」が頻出し⁽¹⁷⁾、その他 ἀξιῶ「要求する」もある⁽¹⁸⁾。これらの言葉が、嚴命文の始まりを示す印の役割を果たしている。

T1/3 は不完全な文章である。欠損がある訳ではない。単にスペースの関係からか、書きかけになっているだけである。κατὰ τῆς ὑμε[τέ-「汝らの～によって」]の欠落を補って Gager は by your [names] (Gager [1992], p.70)、Bevilacqua も attraverso i vosrti nomi (Bevilacqua [2012], p.608)、つまり「汝らの名(pl.)によって」と復元している。しかし「名」ὀνομάτων は中性名詞の複数なので、先行する定冠詞 τῆς と性数ともに一致しない。そこで T2/3 と比較すれば、T1/3 は T2/3 の書き損じであることが判明する。T2/3 では ὑμῶν が一回余分に書かれている。ἐνφερνίων はラテン語の inferni「死者たち」のギリシア語音写である。「汝ら」とは、水の神、泉の神、(死者たちの) 女王を指すので、「汝らの聖なる死者たちによって」とは、これらの神々が死者たちを子分として使役することを指している。ここに「人間→場所の神々→死者たち」という命令系統が浮かび上がる。

3) 内容

嚴命の内容は基本的に εἶνα (= ἴνα)「～するように」で始まる。従ってこの語は内容の出発点を示す目印となる。この語は先行する嚴命の動詞「誓わせる」と結び付いて、文字通りには「誓わせる」「～するように」と訳されるが、強い命令表現として「嚴命す」「～せよ」と訳した。内容は基本的に、能動相直接法未来二人称複数の動詞を核として構成される。この呪詛板に見られる動詞には、ドーリス方言⁽¹⁹⁾の約音⁽²⁰⁾が認められる。これは呪詛板製作者の出身地を暗示している。T1/4 と T2/4 は文章が異なるので、両方を訳出する。

T1/4 の試訳：「ともに力を合わせよ、そしてともに引き止めよ、そして引き戻せ、そして拷問のベットで拷問し、酷い死に方で死なせよ、カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり」。συνεργήσητε(συνεργέω)「ともに力を合わせる」。συνκατησχῆτε(συχκατέχω)「help in holding down、ともに引き止める」。ἐπικ[α]-

τησῆτε (ἐπικατέχω)「引き止める、引き戻す」。ποιήσητε (ποιέω)「なす」。κατὰ κράβατον (「ベットで」、κράβατος「粗末なベット」)。τιμορίας (τιμωρία)「復讐、罰」、ここでは「拷問の」と訳した。τιμωριζόμενον (τιμωριζόμενον の誤字)、τιμωρέω「復讐する、罰する」の受動態分詞、ここでは「拷問された(状態に)」の意味。κακῶ θανάτῳ「酷い死に方で」。κακη ἔξι は書き損じか。ἐξελθῖν (= ἐξελεθῖν, ἐξέρχομαι)「出て行く、終わる、実現する」、つまり「死なせること」。Κάρ[δη]λον ὄν ἔτεκεν μ[ήτηρ] Φωλγεντία「カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり」。呪詛板においては常に、母親の名前を示して人物を特定する。公文書においては常に、父親の名前を示して人物を特定することと対照的である。古代における人格攻撃の常套手段の一つに、相手の出自を卑しく見せるという方法があった(Dickie [2001], p.220)。父親の名前を挙げないことによって、事実は別として、庶子の体裁を取ったのではないだろうか。

T2/4 の試訳：「(我が) 汝らに引き渡すや否や、この、神を蔑ろにする、そして無法な、そして憎むべき、カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり、縛り、ともに縛り、縛り倒せ」。[ὦ]σπερα (= ὦσπερ)「～するな否や」。ὕμιν「汝らに」とは水の神、泉の神、(死者たちの)女王を指す。παραθίθομε(= παραδίδωμι)「引き渡す」。δυσσεβήν (δυσσεβής)「不敬虔な、邪悪な」、ここでは「神を蔑ろにする」と訳した。ἄνομ[ον] (ἄνομος)「無法な」。ἐπικατάρατον (ἐπικατάρατος)「憎むべき、忌まわしい、呪われた」。ἐδεμέμων (δέω, ἐδεμένων の誤字)「縛る」の受動分詞男性単数対格(ω = ο)。συνδεμένον (συνδέω)「(例えば、手と手を、脚と脚を、人と人を) いっしょに縛る」。κατεδεμένον (καταδέω)「縛る、tie down」、ここでは「縛り倒す」と訳した。

(3) 段落2

ここからは、呪詛板に描かれた神々に対する命令である。この段落には乱れが見られる。内容から判断して、召喚(T1/5)は本来、下の嚴命(T1/9)を含んでいたと考えられる。書き忘れに気づいて、後から書き加えたのだろう。同様の内容の嚴命(T2/9)も、本来は空欄(実際のテキストに空欄がある訳ではない)のT2/5に書かれるはずだったと考えられる。そうでないと、三つの段落が成り立たないからである。この段落には三つの内容が含まれる。

1) 召喚

T1/5 の試訳：「(我は嚴命す) また汝、聖なるエウラモンよ、そして聖なるカラクテーレスよ、そして聖なるパレドロイよ、右と左にいますところの、そして聖なる聖なるシュムフォーニアよ、水道管(の鉛)で作ったこの板に描かれたところの」。続けてT1/9の試訳：「(我は) 汝らにも嚴命す、聖なる天使たち及び大天使た

ちに、地下の者に」。

καὶ σέ「(我は厳命す) また汝」と補って訳した。ἅγιε Εὐλάμων「聖なるエウラモーンよ」。ἅγιοι χαρακτήρες「聖なるカラクターレスよ」。ἅγιοι πάρεδροι οἱ ἐν δεξιῶ καὶ [ἰ ἀριστερῶ]「聖なるパレドロイよ、右と左にいますところの」。ἀγιαγία Συμφωνία「聖なる聖なるシウムフォーニアよ」。ἀγιαγία は ἅγια を二つ並べた造語、「最も聖なる」と訳しても良いだろう。この「シウムフォーニア」が呪詛板に書かれた「母音連続」を指すことは知られている。ἄπερ γεγραμμένα ἐν τούτῳ τῷ πετάλῳ [τῷ ψυχρωφώρῳ]「水道管（の鉛）で作ったこの板に描かれたところの」。ἄπερ は文法的には直前の Συμφωνία にかかるが、意味的にはエウラモーン、カラクターレス、パレドロイ、シウムフォーニア全てにかかる。「この板に描かれたところの」とは、この呪詛板に描かれたこれらの神々の図像を指している。これらの神々は板に描かれた神々である。つまり呪詛者は、最初に呪詛を行う場所の神々に命令し、更に呪詛板に描かれた神々にも命令したのである。

「水道管（の鉛）で作った」とは、公共の水道管を破壊して鉛を調達し、それで呪詛用の板を作ったという意味である。博物館に展示されているローマ時代の鉛の水道管を見る限り、かなり厚みがあるので、そのままでは利用できない。おそらく溶解して、適切な厚さの板に作り変えたのだろう。ある魔術パピルスには、λαβὼν μόλιβον ἀπὸ ψυχροφόρου σωλῆνος ποίησον λάμναν καὶ ἐπίγραφε χαλκῶ γραφείῳ「水道管から鉛を取って、薄い板を作れ、そして青銅の尖筆で書け」(PGM VII, 397-398) という指示があり、水道管の鉛が利用されたことは一般的なことであったようだが、その理由は鉛が安価な金属だったということではなく、地中に埋められた水道管の冷たさが魔術を始動させるという観念にあったと考えられ、また公共物を破壊するという反社会的な行為も同様な効果があったとも考えられている (Ogden [1999], p.12-13)。水道管の冷たさは、水の神、泉の神、(死者たちの) 女王の属性にも適合する。「地下の者に」については、下で述べる。

T2/9 の試訳「何となれば（我は）汝らに厳命す、聖なる天使たち及び大天使たちに、そして聖なるエウラモーンに、そして聖なるパレドロイに、そして聖なるシウムフォーニアに、そして聖なるカラクターレスに、水道管（の鉛）で作ったこの板に描かれたところの」。これは T1/5+T1/9 とほぼ同じである。

2) 内容

この段落には三つの内容が含まれている。T1/6 の試訳：「(我が) 汝らに引き渡すや否や、この、神を蔑ろにする、そして憎むべき、そして不幸な、カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり、縛り、ともに縛り、縛り倒せ、カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり」。この文章は T2/3 のほぼ繰り返しである。παραδείδουμε (= παραδίδωμι) 「引き渡す」。δύσμωνρον (δύσμορος)

「不幸な」。

T1/7 の試訳：「さあ引き止めよ、そして拷問のベットで拷問し、酷い死に方で死なせよ、カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり、5日以内に」。T1/4 と基本的に同じ文章である。οὕτως 「(命令を強めて) さあ」。εἴσω ἡμερῶν πέντε 「5日以内に」、魔術の期限に関する記述については後でまとめて述べる。

T2/6 の試訳：「彼を。ともに力を合わせよ、そして引き止めよ、そして引き渡せ、地下の者に、死者たちの(住む)タルタロスの牢獄へと、神を蔑ろにする、そして無法な、そして不幸な、カルデーロスを、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり、そしてこの者が冷水を(飲んでしまう)や否や、冷やし尽くせ、窒息させよ、衰弱させよ、死なせてしまえ、窒息させよ、(神を蔑ろにする、憎むべき)彼を、そして彼の魂を、そして彼の骨を、そして彼の髓を、そして彼の髓を、そして彼の肉を、そして彼の力を、カルデーロスの、彼を産んだ母はフォールゲンティアなり、今この時刻このアレスの日から5日以内に」。[αὐ]τὸν「彼を」は本来、T2/4 の一部であるので、[εἶνα] より前に書かれるべきであった。

παραδ[ώσ]ητε τῷ [καταχθονίῳ] 「引き渡せ、地下の者に」。「地下の者」とは誰を指すのか。これは T1/9 の τῷ καταχθονίῳ と同じものを指すはずである。ヒントは次の句にある。[εἰς τ]ὸν τῶν ταρτάρων οἶκον τῶν ἐνφερνίων 「死者たちの(住む)タルタロスの牢獄へと」。ギリシア神話によれば、〈タルタロス Τάρταρος (pl. Τάρταρα) は冥界の一番下の部分であり、ハデス(冥界)との距離は天と地ほどもあったとされる。タルタロスは神々に背いた大罪者が落とされる牢獄である。また神格化されてテュフォーンの父ともされる〉(高津 [1960] タルタロス、147—148頁)。οἶκος は基本的に「家」であるが、必ずしも家屋の形態でなくても、住む場所なら何でも指す。従ってここでは「牢獄」と訳するのが適切であろう。すると τῷ [καταχθονίῳ] とは「タルタロス」を指すことが判明した。そして T1/9 の「地下の者に」という句は、本来 T2/6 のような文章に属する要素であったのに、なぜか他の文章にまぎれ込んでしまったものなのだろう。

ωπιονεπι ψυχ[ρός] の ψυχ[ρός] は「冷たい、冷水」の対格。ωπιονεπι は不明の綴りである。しかし私には、πίνω 「飲む」と関係があるように思われる。例えば、三人称単数完了形の πέπωκε(ν) 「飲んでしまう」の書き損じではないだろうか。καταψυχρένετε (καταψυχραίνω > σβέννυμι) 「quench, dry up, cool」、> καταψύχω 「冷やす」。ἐπανχωνίζετε (ἐπί + ἄγχω) 「首を絞める、窒息させる」、ラテン語 *ango* からか。μαρ[έ]νετε (μαραίνω) 「消す、弱める、衰えさせる」。κ[ατα]μαρέ[νε]τε (καταμαραίνω) 「cause to wither, make lean, die away」。κατά 「～し尽くす」。συνζαρι καταραζι ὄντα の συνζαρι καταραζι は Wunsch も解説不能としている (Wunsch [1898], S.18)。この不明箇所は私には *δυσσεβήν κατάρατον* の書き損じのように思われる。つまり 「(神を蔑ろにし、憎むべき)彼を」となる。τήν ψύχην(ψύχη)「魂」。τὸ ὀστέα(ὀστέον)「骨」。

τοὺς μυαλοὺς (μυελός) 「髓、脳髓」。τ[ὰ] νεῦρα (νεῦρον) 「腱、筋」。τὰς σάρκας (σάρξ) 「肉」。τὴν δύναμιν (δύναμις) 「力」。

ἀπὸ τῆς ἄρτι ὥρας καὶ ἡμέρας Ἄρεως εἴσω ἡμερῶν πέντε 「今この時刻このアレスの日から5日以内に」。この呪詛板の表面にも「5日以内に」というフレーズがある (ST16A, 50-51) これは今行ったばかりの呪詛の発動の時を記した言葉である。その主な表現として、「今この時刻（この日）から」ἀπὸ τῆς ἄρτι ὥρας (καὶ ἡμέρας)⁽²¹⁾ (ST20A, 22, 24-25, 42-43)、ἀπὸ τῆς σήμερον ἡμέρας καὶ ὥρας 「今日この日この時刻から」 (ST17, 32-34, 42; ST21, 7, 24, 28-29; ST22, 7, 12-13, 55; ST25, 31; ST27, 51-52; ST28, 15-16; ST30A, 11-13)、「この日この時刻から」ἀπὸ ταύτης τῆς ἡμέρας καὶ ὥρας (ST23, 14, 28-29; ST26, 26?, 31) の三つがある。これら三つの表現が一枚の呪詛板に混在することはない。また特異な表現として、「この日この夜この時刻から」ἀπ[ὸ] ἡμέ[ρ]ας καὶ νυκτὸς [καὶ ὥ]ρας (ST25, 32-33) があり、これに似たラテン語バージョンとして、「この時刻からこの日からこの夜から」ab hac ora ab hoc die ab hac nocte (ST1, 2, 11) がある。

呪詛の発動する「今日」が「アレスの日」であることを明記したものがいくつかある。「今この時刻このアレスの日から」ἀπὸ τῆς ἄρτι ὥρας καὶ ἡμέρας Ἄρεως (ST16B, 67-68)、「今日このアレスの日から」ἀπὸ τῆς σήμερον ἡμέρας Ἄρεως (ST16B, 83)、「今日このアレスの日から」ἀπὸ τ[ῆς] σή[με]ρ[ον] ἡμέρας [καὶ τῆς ἄρτι ὥρας] (ST22, 27-28)、「アレスの日の今この時から」ἐξ [Ἄ]ρε[ω]ς ἡμέρας [καὶ τῆς ἄρτι ὥρας] (ST25, 24)。「アレスの日」とは今の火曜日のことであり、このことは呪いが火曜日に行われたことを示しており、軍神アレス（ラテン語でマルス）が占星術において害をなす天体と見なされていたことから分かるように、この神の司る日は災いが起こる日と信じられていたので、この日に魔術を行うと効果があると考えられた (Wünsch [1898], S.79)。

一週間の内でもう一日、害をもたらず曜日とされたのは「クロノスの日」、つまり今の土曜日である。この日も呪詛に有効な日と信じられた。従って、「アレスの日（火曜日）」から数えて「クロノスの日（土曜日）」は5日目に当たるので、「5日以内に」というフレーズは (ST16A, 13-14; ST16B, 67-68; ST25, 24)、「次の災いの日まで」という意味で、次の土曜日を指していた (Wünsch [1898], S.79)。

(4) 段落3

これは、場所の神々と板に描かれた神々の両方に対する命令である。どちらのグループの神々も既に呼び出されているので召喚はなく、厳命と内容だけである。

1) 厳命

T1/8 の試訳：「何となれば（我は）汝らに厳命す、地下で復活し日輪を引き止める者（の名）において、そして（その隠された本当の名は）オイメーネベンキュク・

パーキュク・バーカキュク・バーザキュク・バーカザキュク・パーカクシキュク・バデーゴフオフトフーシロー（なり）。T2/8 も呪文が微妙に違っている以外は全く同文である。「汝ら」とは、①場所の神々：水の神、泉の神、（死者たちの）女王、②板の神々：エウラモーン、カラクテーレス、パレドロイ、シユムフォーニア、天使たち及び大天使たちの両方を指す。両グループの間に上下関係は見られない。

κατὰ τοῦ ὑπὸ γῆν ἀνανεάζοντος τοῦ κατέχοντος κύκλα を Gager は次のように訳している。For I invoke you by the one who grows young, under the Earth, and restrains the circles (of the zodiac) (Gager [1992], p.71⁽²²⁾)。それに次の註を付けている。Here occurs the common Egyptian notion that the gods renew the universe each night, in constant cyclical fashion (Gager [1992], p.71, note 99)。さて、ここである神が言及されているのであるが、ゲイジャーの訳ではそれがどの神なのか分からない。また註では、「神々が宇宙を若返らせる」とあるが、「若返る」と「若返らせる」は違う。この句は再考の必要がある。

まず τοῦ ὑπὸ γῆν ἀνανεάζοντος について。ὑπὸ γῆν「地下で」は問題ないが、ἀνανεάζοντος の ἀνανεάζω は「若返る」であり、「若返らせる」ではない。地下において「若返る者」とは何か。エジプトの神話によると(吉村[2005]66頁; Bonnet [1952] Apophis, S.51-53)、〈太陽神ラーは、日没後は聖船に乗り込み、地下世界を西から東に航行する。再生を願う死者たちも同行する。そして途中、エジプト人にとって最も危険な地とされた夜が覆うドウアトを通るが、そこには巨大なアポピス蛇がいて、聖船の運行を妨げた。太陽神ラーはこの蛇と戦い、最も夜が深くなる頃には、再生のシンボルであるオシリスと合体して力を蓄え、やがて再生を果たし、日の出の時を迎える〉という。この神話によれば、「若返る者」とは太陽神ラー、つまり太陽のことであり、その若返りを妨げるものは、「アポピス大蛇」ということになる。呪詛板にしばしば描かれた蛇を想起される。

しかし、もし「若返る者」が太陽であるならば、その太陽が同時に τοῦ κατέχοντος κύκλα「日輪を引き止める者」となってしまう矛盾する。それとも太陽神ラーとアポピス大蛇が併記されているということなのだろうか。どちらも違うだろう。上の神話には続きがある。アポピス大蛇はラーの船の前でナイフによって切り刻まれ、槍で刺し殺され、あるいは火で焼かれるが、翌日には同じ戦いが繰り返される (Bonnet [1952] Apophis, S.52-53)。つまり再生するのは太陽神ラーだけでなく、アポピス大蛇もそうである。そうすると「地下で若返り日輪を引き止める者」とは、アポピス大蛇であることが分かる。「若返り」は「再生し」ないし「復活し」と訳してもいいだろう。

最後に κατὰ は「～によって」でもいいが、次に「パーカクシキュク呪文」が続き、呪文はそもそも、神々の隠された本当の名前であり、神々を屈服させる切り札である。さらに神々にも上下関係があり、下役の神々の前で、彼らの上役の神々の隠さ

れた本当の名前を唱えると、下役の神々は震え上がり、唱えた人間に服従するとされるので、「～（の名）において」と訳した。ここに「人間→アポピス大蛇→場所の神々・板の神々→死者たち」という上下関係が想定される。

この呪文にも様々なバリエーションがあり、まとめて「パーカクシキユク呪文」と呼ぶこととする。最初の Ομνηνε Οι は不明であるが、μνηνε はコプト語の myne「昼」と関係があるようだ⁽²³⁾。最後の βαδηγοφωθφθωσιρω も分からない（後半部分は回文のように見える）。しかしこれら前後を除いた部分の意味は分かる。これはエジプト語の βακαξιχουχ が基本形で、βα は「魂」、κακ は「闇」、σι は「息子」、χουχ も「闇」、つまり「闇の魂・闇の息子」となる、これの異形が大量に連なっているだけである（Brashear [1995], p.3582）。地下世界で太陽神ラーの乗った聖船の運行を妨げる大蛇アポピスの隠させた本当の名前が「闇の魂・闇の息子」なら、違和感がないだろう。

2) 内容

T1/10 の試訳：「(我が) 汝らに引き渡すや否や、この、神を蔑ろにする、そして無法な、そして憎むべき、カルデーロスを、彼を生んだ母はフォールゲンティアなり、さあ彼を、拷問のベットで拷問し、酷い死に方で死なせよ、5日以内に」。これは既に出たフレーズの組み合わせである。

T2/10 の試訳：「ともに引き止めよ、そしてともに縛れ、そしてともに力を合わせよ、そして冷やし尽くせ、彼の活力を、彼の髓を、彼の腱を、彼の肉を、彼の力を、若さの最中にあるカルデーロスを、彼を生んだ母はフォールゲンティアなり、……引き止めよ、……そして彼の若さを、……カルデーロスを、彼を生んだ母はフォールゲンティアなり、今日このアレスの日から……7日目であれ……」。T2/6 と似た文章である。ισχύν (ισχύς) 最も広い意味で「力」。εἴτε ἐβδόμης「7日目であれ」という箇所は前後関係が不明であるが、一週間後の「アレスの日」を指しているのだろうか（実際には8日後だが）。

(5) 督促

T1/11 と T2/11 は全く同じである。試訳：「早く早く」。この句は上記の命令を速やかに履行せよとの督促であり、本文テキストの終わりの印である。

第二章 ST21の本文テキスト構造分析（表2）

ST21 は四つの本文テキストを含む。また ST20 と同様の図像が描かれている（Wünsch [1898], S.29⁽²⁴⁾）。裏面には何も書かれていない。この図像の全体的な構図は、ST16 と基本的に同じであるが、大きく異なるのは、呪詛の標的が一体のミ

イラとしてではなく、後ろ手に縛られた四人の馭者として描かれている点にある。文章も一行ごとに上下逆さまではなく、普通に書かれている。

本文テキストの構造も基本的にST16と同じである。表題で始まり、督促で終わる。その間に挟まれた段落も同様に三つある。ただし各段落は召喚と内容、あるいは厳命と内容の二つで構成されている。最初の段落は場所の神々に対する命令である。二番目の段落も字面だけ見れば場所の神々に対する命令が書かれているが、ST16の分析から明らかになった構造から判断すれば本来は板に描かれた神々に対する命令でなければならない。しかしそれは省略されて、代わりに場所の神々に対する命令が、これも大分省略された形で書かれている。

(1) 表題

T1/1の試訳：「令状」。この文言はT2/1では省略されているが、T3/1とT4/1には書かれている。

(2) 段落 1

この段落は、場所の神々に対する命令である。召喚と内容で構成されている。

1) 召喚

T1/2の試訳：「汝ら、水の神よ、泉の神よ、(死者たちの)女王よ、(汝らの隠された本当の名は) アネアエコーロー(なり)」。いずれのテキストも、呪文のバリエーションを除けば、ほぼ同じである。ただしT3/2では「汝ら」が、T4/2では「ネアエンコーロー呪文」が省略されている。召喚された神々もST16と同様である。ただし綴りにおいてはST16と異なる。「水の神」はΦρυγίαではなくΦυδρίαであり、「泉の神」はΝυμφεεではなくΝυμφεαιであり、「(死者たちの)女王」はΕιδωνεαではなくΑιδωναιである。つまり系統が違う。このことは書き手の違いを暗示しているのだろうか。

2) 内容

この段落には厳命がない。おそらく召喚と厳命が兼用されたのだろう。T1/3は馬に対する呪詛である。T1/3の試訳：「(我は汝らに厳命す) 引き止めよ、緑組の馬たちを、・・・ユーデークスの連馬と緑組の・・・を、そしてユーデークスを、ヘーリオドロモスを、ソールを、ヒッポニコスを、ラオーメドーンを、ポンターノスを、エウボロスを、オリュムピオニケーを、アウレオスを、(以上が) 緑組の引き馬たち、バビュローニオスを、ウーラニオスを、・・・を、サゲータを、コピドーンを、・・・を、アキレウスを、アポレイオスを」。T4/3は馬と馭者に対する呪詛であるが、馬の名前が列挙されている。T4/3の試訳：「(我は汝らに厳命す) 引き止めよ、・・・

馭者たちを・・・・ゲルを、フォイボスを、フォルフォレオスを、ポリュ〜フォ〜を・・・・、(以上が) 赤組の引き馬たち、〜ポ〜を、・・・アウダスを、アドリアスを、バビュローニオスを、・・・ヘーリオドロモスを、オルサートスを]。

τοῦ πρασείνου「緑組の」、τοῦ ῥωσέου「赤組の」。戦車競技の出場チームには、四つの「組」(factio / μέρος)があり、それぞれ色の名前が付けられていた。「緑組」(prasina / πράσινον)、「青組」(veneta / βένητον)、「赤組」(russata / ρούσιον)、「白組」(albata / λευκόν) (Bevilacqua [2012], p.602)である。セト呪詛板には、全ての組が言及されているが、緑組、赤組への言及が多く、白組、青組は稀である。

τὴν γρέγην Ἰούδεικ[ος]「ユーデークスの連馬」。これは〈この馬をキャプテンとした四頭からなる一連の馬を指す。γρέγηνはラテン語 grex「群れ、部隊」の転用である。連馬のキャプテンは普通「引き馬」δέστριου (ST21, 8, 80) になる、それは連馬の中で一番左を走る馬のことで、戦車競技場のメタエ(折り返し標識)のところで左に旋回する際に、この馬の「引く」技術が勝敗を決したからである。「引き馬」の語源は不明であるが、イタリア語に destriere「競走馬」という単語がある〉(Wünsch [1898], S.29)。

δεοπίους「(以上が) 引き馬たち」と補った。おそらくこの語は、この語より先に書かれた馬たちにかかるのだろう。なぜならば、既に述べたように、「引き馬」が「連馬」のリーダーだから、他の馬たちよりも先に書かれるはずである。

セト呪詛板に書かれた名前が分かる馬のリストを作成した(表3⁽²⁵⁾)。馬の名前の付け方には一定のルールがある。①産地名に由来する名前(1?, 4, 16?, 17?)、②毛色に由来する名前(2, 13)、③勝利を連想させる名前(8, 11)、④馬の気性に由来する名前(9?, 18?, 19?)、④俊足を連想させる名前(3, 10, 14)、⑤天体の運行になぞらえる名前(5, 6, 7?, 12, 15, 20, 21)。特に⑤の命名法は、呪詛板に見られる永遠の循環という宗教思想と関連していると考えられる。

ところで、馬の寿命について、大プリニウスによれば、馬は他の仕事なら2歳で馴らされるが、戦車競技には最低でも5年はかかり(Plin, NH, 8.162)、20歳で戦車競技を引退して種馬になるという(Plin, NH, 8.162)。従って、戦車競技用の馬の現役期間は、事故や故障がなければ、5歳から20歳までの15年間と考えられる。馬のリストを見ると、ST20, ST21, ST22, ST27の4枚の呪詛板に馬の新旧交代が見られないことから、これらの呪詛板は、ごく短期間に書かれたのだろう。

T2/3とT3/3は馭者に対する呪詛である。T2/3の試訳：「(我は汝らに厳命す) 引き止めよ、緑組の馭者たちを、特にエウトュミオス又の名マクシモス又の名ギダス、パスカシアの息子を、同時にまたエウゲニオス又の名ケーレオス、ベネリアの息子を、ドムニーノス又の名トーラクス、フォルトゥーナの息子を」。T3/3の試訳：「(我は汝らに厳命す) 引き止めよ、アステリオス又の名サペードーソス、エイレーネーの息子を、特に・・・を」。

セト呪詛板の中で名前の分かる馭者は10人いる (Wünsch, [1898], S.119)。彼らの名前が言及された呪詛板を表にまとめた (表4⁽²⁶⁾)。この表を見て分かるように、これら10人の馭者の名前は、上記14枚の呪詛板において互いに重なり合って書かれているので、彼らは皆、同時代人であったと見て間違いはない。一般に馭者の多くは若くして事故死したようであり (Willekes [2016], p.217)、彼らの選手生命は、運が良くても10年から15年、25年も現役を続けられることは稀だった⁽²⁷⁾。

(3) 段落2

この段落も先に召喚した神々に対する命令の形をとっている。しかし本来はここに、板に描かれた神々に対する命令が書かれるはずであった。

1) 嚴命

T1/4 の試訳：「(我は) 汝らに嚴命す、聖なる泉の神よ」。T4/4 も同文である。しかし T2/4 では省略されている。T3/4 は欠損している。「汝ら」ὕμᾱς と言いながら、泉の神にしか呼びかけていない。これは当然、水の神と (死者たちの) 女王が省略されているだけである。

2) 内容

T1/5 は馬に対する呪詛の内容である。T1/5 の試訳：「引き止めよ、そしてこれら緑組の馬たちを、この板に書かれたところの、足なし、力なし、救いなしとなせ」。T2/5、T3/5、T4/5 は馭者に対する呪詛の内容である。T2/5 の試訳：「引き止めよ、そして転覆させよ、そして彼らを、足なし、力なし、救いなしとなせ、そして・・・頭・・・出来ない・・・肝臓・・・」。ἦπαρ「肝臓」。T3/5 の試訳：「・・・救いなしとなせ」。T4/5 の試訳：「引き止めよ、これら赤組の馭者たちを、特に・・・ピケンティアが産んだ息子を、・・・」。T4/6 の試訳：「引き止めよ、そして彼らを、力なし、足なし、救いなしとなせ、・・・馬たちの・・・」。いずれの文章もほぼ同じであり、κατασχῆτε「引き止めよ」、καταστρέψητε「転覆させよ」、ἀπόδους「足なし」、ἀδυνάμους「力なし」、ἀβοηθήτους「救いなし」という表現が共通であり、これらの語句はセト呪詛板に頻出する。

T1/5 の [τ]οὺς [γρ]αμμένους ἐν ταύτῃ τῇ λεπίδει「この板に書かれたところの」という句は「馬たち」にかかるが、同様の句は ST16 では「神々」にかかった。どちらも段落2に見られる表現である。どうやらこの句は、本来は段落2に書かれるはずであった「板に描かれた神々」に対する嚴命の名残りと転用であるように思われる。

(4) 段落3

この段落は、厳命と内容から成っている。本来は、場所の神々と板の神々の両方に対する命令であったはずであるが、段落2において板の神々が言及されないの、形としては場所の神々のみに対する厳命になっている。

1) 厳命

T1/7, T2/7, T3/7, T4/7 は、いずれも呪文のバリエーションを別とすれば、ほぼ同文である。T1/7 の試訳：「何となれば（我は）汝らに厳命す、暴力によって車輪を引き止める者（の名）において、（その隠された本当の名は）メーネバインキュク・バインキュク・バーキュク・バーキュク・パーカクシキュク・バーデインゴフトートフトーシロー（なり）」。

「暴力によって車輪を引き止める者（の名）において」というフレーズは、ST16 の T1/8 と T2/8 で既に見た「地下で復活し日輪を引き止める者（の名）において」のバリエーションである。それらの原文を比較すると、下線部だけ違うことが分かる。

① κατὰ τοῦ ὑπὸ γῆν ἀνανεάζοντος τοῦ κατέχοντος κύκλα⁽²⁸⁾。

② κατὰ τοῦ ὑπὸ τὴν ἀνάγκην τοῦ κατέχοντος κύκλα⁽²⁹⁾。

長さは違うものの、かなり似た単語であるため、もしかしたら書き手による見間違いか、あるいは意図的に単語の書き換えが行われたのではないだろうか。

従来、τὴν ἀνάγκην は運命の糸を紡ぐ女神「アナンケー」Ἀνάγκη のこと、そして κύκλα はオルフェウス教・ピュタゴラス学派の思想である「魂の循環」すなわち「輪廻転生」のことと解釈されてきた (Wünsch [1898], S.94)。この思想はプラトンの『国家』の中の「エルの物語」で詳細に描かれている。その要約は以下の通り。〈エルは戦死した12日目に蘇り、自分が見た死後の世界の様子を語る。死者の魂は旅をして牧場に至り、そこで裁判される。良い行いをした魂は天に通ずる穴を通り、悪い行いをした魂は地に通ずる穴を通過して、それぞれの場所に行き報酬ないし罰を受ける。それらを十分に受けると再び牧場に戻って来る。魂たちはまた旅をして、天と地を貫く光の柱の所に行く。そこにアナンケーが玉座に座り、膝の中で「アナンケーの紡錘」Ἀνάγκης ἄρτακτον を回している。それによって全ての「蒼穹」περιφοράς も回転している。また彼女の娘たちラケシス、クロト、アトロポスも玉座に座っている。魂たちはラケシスの前に行くと、これから「新しい周期」ἄλλης περιόδου が始まると告げられる。魂たちは籤で順番を決め、たくさんの生涯の見本の中から自分の来世を自ら選び取る。すると魂は「必然によって」ἐξ ἀνάγκης、その生涯に縛り付けられる。それから魂たちはまた旅に出て忘却の野へ行き、そこでこれまでの記憶を消去して、それぞれの新しい肉体のところへ飛んで行く〉(Plat, *Respub.* X.13-16, 614B-621B; 藤沢訳『国家』下 354-373 頁)。ここには κύκλα という単語は

出ないが、「紡錘」「蒼穹」「周期」がそれに当たり、特に「周期」が魂の肉体から肉体への循環、すなわち「輪廻転生」を指しているのは明らかである。この思想をディオゲネスは κύκλον Ανάγκης「アナンケーの輪」(Diog. Laert. *Pyth.* VIII.14; 加来訳『ギリシア哲学者列伝』下23頁)と呼んでいる(Wünsch [1898], S.94)。

確かに、「アナンケー」「輪」というキーワードは揃っているが、これらのキーワードを使って②の文章を訳すと(κατὰ は省略する)どうなるだろうか。試訳A「アナンケーによって輪廻転生を引き止める者」。輪廻転生はアナンケーが司っているに、彼女を使ってそれを引き止める神とは何者か想像できない。試訳B「アナンケーによる輪廻転生を引き止める者」。字面はいいが、どの神のことを指すのだろうか。確かに、エルの物語の中には、地獄から戻ってきた魂が十分な罰を受けたかどうかチェックする番人がいたが、その番人を指しているのだろうか。それだとあまりにもマイナーな存在ではないだろうか。呪詛板テキストの本文の文脈からすれば、呪詛板に言及された神々に号令をかけることが出来る彼らの上役でなくてはならないので、番人は該当しない。別な神だとしても、そもそも「輪廻転生の阻止」ということ自体、現世における呪詛と違和感がある。

そこで ἀνάγκη を普通名詞として理解するとどうなるだろうか。この単語は普通名詞として「必然、運命」の他に「強制、暴力、拷問、罰」という意味もある。ここで呪詛板の図像を想起すべきである。馬頭の神は、左手に輪を持ち、左腕を脇にグッと引き付けている。つまり「輪を引き止めている」のである。また彼は右手に「鞭」を持っている。「鞭」は「強制、暴力、拷問、罰」のシンボルではないだろうか。拷問に使われた「梯子」の図像もセト呪詛板に描かれており、同様のシンボルであろう。そのように考えると、試訳C「暴力によって車輪を引き止める者」と訳すことが出来る。つまり②は馬頭の神の図像の説明文のようにになっているのではないだろうか。おそらく本来は、①がエジプトの神話に基づくオリジナルの文言だったのだろう。それに綴りが似ているので、ギリシアでアナンケーの語が融合したものと思われる。

ところで、この呪詛板にはバーカクシキユク呪文が四回書かれているが、同じ書き手によって書かれたにも関わらず、呪文は少しずつ異なっている。どうもわざと書き換えているようである。

2) 内容

T1/8 の試訳：「引き止めよ、これら緑組の馬たちを、そしてそれらを、頭なし、足なし、力なしとなせ、そしてそれらに、足枷をかけよ、パピュローンの戦車競技場において、今日この日この時刻から」。T2/8 の試訳：「・・・第24レースまでに」。これは馭者に対する呪詛の内容である。T3/8 の試訳：「引き止めよ、アステリオス又の名サペードーソス、特にエイレーネーの息子を、アルテミオスを、今日この日

この時刻から」。T4/8 の試訳：「引き止めよ、彼らを、今日この日この時刻から、12日目の第24レースまでに」。

ここでは身体部位に関する語彙として ἀκε[φάλους]「頭なし」も新たに見られる。[ἐμποδι]σθῆνε (ἐμποδίζω)「足枷をかけよ」。ἐν τῷ εἰπ[πικῶ τῆς Βαβυλῶν]ος「バビュローンの戦車競技場において」。これは4世紀に建設されたマクセンティウスの戦車競技場を指すと考えられている (Bevilacqua [2012], p.603)。その他、戦車競技場に関する言及としては、ἐ[ν] τῷ κίρκῳ τῆς [νέας] Βαβυλῶνος「新しいバビュローンの戦車競技場において」(ST22, 19-20)、ἐν τῷ εἰπικῶ「戦車競技場において」(ST22, 42)、ἐν τῷ δρομίῳ「戦車競技場において」(ST25, 33)がある。因みに ἐν τῷ ἱπ<ι>πικῶ Ἰρώμης「ローマの戦車競技場において」(ST49, 57)は、キルクス・マクスィムスを指すものと考えられる (Bevilacqua [2012], p.603)。どちらの戦車競技場も、セト呪詛板の発見地からほぼ同距離のところにある。

[ἔως τοῦ εἰ[κ]οστοῦ τε[τάρ]του μήσου「第24レースまでに」。μήσου / μίσουはラテン語の missus「(競走の)一試合」の転用である (Wünsch [1898] S.27)。「第24レース」とは、1日に24レースが行われたので (Wünsch [1898] S.69)、その日の最終レースを指す。

δωδεκάτης「12日目の」(ST21, 96-97; cf. ST29A, 35)とは、呪詛が成就する期限を指している。先に見たように、「アレスの日」つまり火曜日に呪詛を発動したなら、次の災いの曜日は5日後の「クロノスの日」つまり土曜日であるが、12日目とは、それからさらに一週間後の「クロノスの日」を指すことになる (Wünsch [1898] S.79)。

その他 ἀπό πρώτου μήσου <μήσου> ἔως εἰκοστοῦ [τετάρ]του「第1レースから第24レースまでに」という表現 (ST20B, 53-55)を含め、単に「第24レースまでに」という表現は多く見られる。また「レース」の単語にラテン語の転写である μήσους / μίσουςを充てるもの (ST20B, 53-55; ST21, 54-56; ST26, 18)とギリシア語の ἄθλαを充てるもの (ST23, 15; ST26, 15; ST23, 15)があり、両語が一枚の呪詛板に並存する例がある (ST26, 15, 18)。さらに ἐπὶ εἰμοστεο[σάρτην]「第24レースに⁽³⁰⁾」という表現 (ST23, 24)もある。これは一日のレースで最も注目される「最終レースに」事故を期待しているという意味である。

(5) 督促

ST21ではいくつかのバリエーションが見られる。T1/9 の試訳：「直ぐに直ぐに今直ぐに、早く早く早く」。T2/9 の試訳：「直ぐに直ぐに今直ぐに、早く早く」。T3/9 の試訳：「直ぐに今直ぐに、彼らの命の・・・まで」。T4/9 の試訳：「直ぐに今直ぐに、早く早く」。[ἦδω]σι[v]を「今直ぐに」と訳したが、この単語に「今」という意味はない。この語はおそらく、このフレーズの響きをよくして締めくくるために ἦδη から作られた造語であろう (Wünsch [1898], S.25)。「直ぐに今直ぐに、彼らの命の・・・

まで」には、他に見られない文章が続いている。

テキスト3の後半からテキスト4にかけて、馭者の名前の表記の乱れや、ネアエンコーロー呪文の省略（書き忘れか）、また eīva で始まる厳命の内容が二つ続いたり、イレギュラーな記述が目立つようになり、書き手の集中力が切れてきた様子が窺える。

おわりに

セト呪詛板には、完全な既製品とほぼ既製品の二種類があった。ST16 は非常に手の込んだものではあるが、個別的な情報としては標的である人物と彼の母親の名前しかなく、それ以外の要素は汎用可能であるので、ほぼ既製品と言える。一方 ST21 には個別的な情報が全くないので、誰でも使える完全な既製品である。戦車レースの馭者や馬に対する呪詛板は、人気のある馭者や馬が標的にされる、いわば「黒プロマイド」のようなものであったのだろう。呪詛者と馭者との個人的な関係は見られず、馭者に対する呪詛板を購入したのは、戦車レースで有り金をすったギャンブラーで、その腹いせにやったのではないかと考えられる。

構造分析からは、いくつかの訳の修正を含み、本来のテキスト構造が明らかとなった。それによって、セト呪詛板では基本的に、まず「場所の神々」に命令し、次に「板に描かれた神々」に命令し、最後に「闇の魂・闇の息子」の名において、改めて両方の神々に命令するという、三段構えになっていることが判明した。挿入定型句も三角形に配置され、何か「三つ組」ないし「三角形」のシンボルが浮かび上がってくる。それに既に見た永遠の循環という「円形」というシンボルを加えると、どうも「円形」と「三角形」が、セト呪詛板の背景にある宗教思想を暗示しているように思われるが、それが何なのかは今の時点では分からない。今後の課題としたい。

ST16の本文テキスト構造

A (表面) テキスト1 (T1)			B (裏面) テキスト2 (T2)		
1	表題	Λό(γος)- (1)	表題	-	
2	段落1	召喚 ὕμῃς δέε Φρυγία δέε Νυφεε Εἶδωεα νεοικουσε κατοικουσε. (1-3)	段落1	召喚	ὕμῃς δέ[ε] Φρυγία δέε Νυφεε Εἶδωεα νεοικουσε κατοικουσε. (1-2)
3	場所の 神々 に対 する 命令	嚴命 ἐξορκίζο ὑμάς κατά τῆς ὑμε[τέ-] (3-4)	場所の 神々 に対 する 命令	嚴命	ἐξορκίζο ὑμάς κατά τῆς δυνάμεις τῆς ὑμε[τέ]ρας καὶ κατά τῶν ἁγίων ἐνφερνίων ὑμῶν ὑμῶν, (2-3)
4	内容	[εἶν]α συνεργήσητε καὶ συνακατήχητε καὶ ἐπι[κα]τήχητε καὶ ποιήσητε κατά κράβατον τιμορίας τιμωριζόμενον κακῶ θανάτῳ κακῆ̄ ξ̄ξι ἐξε[λί]θῃ Κάρδηλον ὃν ἔτεκεν μήτηρ] Φωλγεντία- (5-13)	内容	εἶνα [ῶ]σπερα ὑμῖν παραθήομε τοῦτον τὸν δυσεβῆν καὶ ἄνομον] καὶ ἐπικατάρατον Κάρδηλον ὃν ἔτεκεν μήτηρ Φωλγεντία ἐδεμένον συνδεμένον κατεδεμένον, (3-6)	
5	段落2	召喚 καὶ σέ, ἅγιε Εὐλάμων <κ>-καὶ ἅγιοι χαρακτήρες καὶ ἅγιοι πάρεδροι οἱ ἐν δεξιῶ κα[ὶ] ἀριστερῶ καὶ ἁγίαγια Συμφωνία ἀπερ γεγραμμένα ἐν τούτῳ τῷ πετάλῳ [τῷ] ψυχρωφώρῳ, (13-21)	段落2	-	
6	板に 描か れた 神々 に対 する 命令	内容	内容	[εἶνα αὐτ]ὸν συνεργήσητε καὶ καταχήσητε καὶ παραδ[ῶ]σητε τῷ [καταχθονίῳ εἰς τὸν τῶν ἀνομων οἶκον τῶν ἐνφερνίων τὸν δυσεβῆν καὶ ἄνομον καὶ δύσμορον Κάρδηλον ὃν ἐτε[κεν] μήτηρ Φωλγεντία καὶ ὥσπερα οὗτος ωπιονεπι ψυχρ[ός] καταψυχρένετε ἐπαχνών[ε]τε μαρ[έ]νετε κ[α]ταμαρ[έ]νετε ἐπαχνών[ε]τε συνζαρι καταραζι ὄντα, καὶ τὴν ψυχὴν καὶ τὸ ὄστέα καὶ τοὺς μυαλοὺς καὶ τ[ά] νεῦρα καὶ τὰς σάρκας καὶ τὴν δύναμιν Καρδήλου [ὃν] ἔτεκεν μήτηρ Φωλγεντία, ἀπὸ τῆς ἄρτι ὥρας καὶ ἡμέρας Ἄρεως εἰσω ἡμερῶν πέντε. (6-16)	
7	内容	εἶνα οὕτως καταχήσητε καὶ ποιήσητε κατά κράβατον τιμορίας τιμωριζόμενον κακὸν θάνατον ἐκλιπόμενον Κάρδηλον ὃν ἔτεκεν μήτηρ Φωλγεντία εἰσω ἡμερῶν πέντε. (30-33)	-	-	
8	段落3	嚴命 ὅτι ὀρκίζω ὑμάς κατά τοῦ ὑπὸ γῆν ἀναναζόντος τοῦ κατέχοντος κύκλα καὶ Οιμηνεβευχυ βαχυχ βαχαχυχ βαχαχυχ βαχαζαχυχ βαχαζιχυχ βαδηνοφωθφθωσιρω. (33-37)	段落3	嚴命	ὅτι ὀρκίζω ὑμάς κατά τοῦ ὑπὸ γῆν [ἀ]ναναζόντος τοῦ κατέχοντος κύκλα καὶ Οιμηνεβευχυ βαχυχ βαχαχυχ βαχυχυχ βαχαζαχυχ βανηαζιχυχ βαδηνοφωθφθωθωσιρω κρε. (16-19)
9	両方 の 神々 に対 する 命令	嚴命 καὶ ὑμάς ὀρκίζο ἁγίους ἀγγέλους καὶ ἀρχ[αν]γέ[λο]υς τῷ καταχθονίῳ, (37-39)	両方 の 神々 に対 する 命令	嚴命	ὅτι ὑμάς ὀρκίζο ἁγίους ἀγγέλους καὶ ἀρχανγέλους καὶ ἅγιον Εὐλάμων καὶ ἁγίους παρέδρους καὶ [ἀ]γία Συμφωνία καὶ ἁγίους χ[α]ρακτῆρες οὗσπερ γεγραμμένους ἐν τούτῳ τῷ πετάλῳ τῷ ψυχρωφώρῳ, (19-23)
10	内容	εἶνα ὥσπερα ὑμῖν παραθ[η]ομε τ[ο]ῦτον τ[ὸν] δυσεβῆν καὶ ἄνομον [καὶ ἐ]πικατ[η]ράτ[η]ον Κάρδηλον ὃν ἔτεκεν μήτηρ Φωλγεν[τία], οὕτως αὐτὸν ποιήσητε κατά κράβατον τιμορίας τιμωρισθῆνε κακῶ θανάτῳ ἐκλιπῆνε εἰσω ἡμερῶν πέντε. (39-51)	内容	εἶν[α] συ[ν]κα[τ]ηχησητε [καὶ] συνδησησητε] καὶ συνεργήσητε] καὶ καταψύξητε τ[ὴν] ἰσ[χυ]ν] τοὺς μυαλοὺς [τὰ] νεῦρα] τὰς σάρκας τ[ὴν] δύναμιν ἐν] ἡλικία Κάρδηλον [ὃν ἔτεκεν μήτηρ Φωλγε[ν]τία] ... ρτ ... χ ... ουσπ ... να ... ενχ ... υχ ... κα[τ]άσχε[τ]ε τοὺς ... ἀχ ... την ... κ[α]τ[η] τ[ὴν] ἡλικίαν απαδουσχαρ ... ενης Κάρδηλον [ὃν ἐτε]κεν μήτηρ] Φ[ω]λγεν[τ]ία ἀπὸ τῆς σημερον ἡμέρας Ἄρεως κ .. ω.ε.τε σχ .. ε ε[ἰ]τε ἐβδόμης ... εω ... (23-32)	
11	督促	ταχύ ταχύ. (51)	督促	ταχύ ταχύ. (33)	

セト呪詛板の本文テキスト構造分析——（前野）

表3

番号	所属	馬名（日本語）	馬名（ギリシア語）	意味	由来	ST20	ST21	ST22	ST27
1	緑組	アポレイオス	Ἀπολείος	アプリア号	産地名に由来？	○	○	-	-
2	〃	アウレオス	Αὔρεος	黄金号	黄金色の毛色に由来	○	○	○	○
3	〃	アキレウス	Ἀχιλλεύς [Ἀκηλλεύς]	アキレウス号	俊足の英雄の名前に由来	○	○	○	○
4	〃	バビュローニオス	Βαβυλώνιος	バビュローン号	産地名に由来	○	○	○	○
5	〃	ヘーリオドロモス	Ἡλιοδρόμος [Ἡλιοδρόμος]	太陽軌道号	馬と天体の周回を同一視	-	○	○	○
6	〃	エウポロス	Εὐπολος	良き天体軌道号	馬と天体の周回を同一視	○	○	○	○
7	〃	ユーデークス	Ἰουδήξ	裁判官号	オシリスのこと？	-	○	○	○
8	〃	ヒッポニコス	Ἴππόνικος	馬の勝利号	勝ち馬になるように	-	○	○	○
9	〃	コピドーン	Κοπίδων	キューピッド号	性欲が強いから？	○	○	○	○
10	〃	ラオーメドーン	Λαωμέδων	ラオーメドーン号	神馬を持つトロイ王の名前に由来	○	○	○	○
11	〃	オリュムピオニケー	Ὀλυμπιονίκη	オリュムピア競技会優勝号	同競技会にも馬の競技があった	○	○	○	○
12	〃	ウーラニオス	Οὐράνιος	天空号	天体と馬の周回を同一視	○	○	○	○
13	〃	ポリュエイデー	Πολυειδήξ	ブチ号	毛色に由来	○	-	○	-
14	〃	サゲータ	Σαγήτα	矢号	矢のように早く走るから	○	○	○	○
15	〃	ゾール	Σῶλ	太陽号	馬と天体の周回を同一視	-	○	○	○
16	〃	フォンターノス	Φοντάνος	ポントス号	産地名に由来？	○	○	○	○
17	赤組	アドリアス	Ἀδρίας	アドリア号	産地名に由来	-	○	-	-
18	〃	アウダス	Αὔδας	無鉄砲号	馬の性格に由来	-	○	-	-
19	〃	オルサート	Ὀρσᾶτος	突進号	馬の性格に由来	-	○	-	-
20	〃	フォイボス	Φοῖβος	光り輝き号	太陽神アポロンの添え名に由来	-	○	-	-
21	〃	フォルフォレオス	Φορφόρεος	天体運行号	馬と天体の周回を同一視	-	○	-	-

表4

番号		ST20	ST21	ST22	ST23	ST24	ST25	ST26	ST27	ST28	ST29	ST30	ST31	ST32	ST33
1	アルテミオス又の名ホスペース サバーダの息子（緑組）	○	○	○	○	○	○	○	-	-	○	○	-	-	-
2	アステリオス又の名サバードーソ エイレーネーの息子（?組）	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	グレゴリオス又の名アセロス アセラの息子（赤組?）	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-	○	-	-	-
4	ドムニノス又の名ジュジュフォス ピケンティアの息子（赤組?）	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-	-
5	ドムニノス又の名トーラク フォルトゥーナの息子（緑組）	○	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-
6	ドムニノス又の名ストローモース ピケンティアの息子（?組）	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	エウゲニオス又の名ケーレオス ベネリアの息子（緑組）	○	○	○	○	-	-	○	○	-	-	-	○	○	○
8	エウトミオス又の名マクシモス又の名ギダ パスカシアの息子（緑組）	○	○	○	-	○	○	-	○	-	-	-	-	-	-
9	エウトルギオス又の名ディオニュシオス ディオニュシアの息子（?組）	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	レストウーツス又の名アルティカコーン（?） レストウータの息子（青組）	○	-	○	-	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-

註

- (1) 小論は2017年6月11日に広島大学で開かれた中国四国歴史学地理学協会大会西洋史部会において報告した「分析ソフト R を使った呪文分析に向けての試論—セト呪詛板を対象として—」の内容の一部に加筆修正したものである。
- (2) セト呪詛板に関する Wunsch 以前の主な研究としては, Matter [1852], de Rossi [1880] が挙げられる。Wunsch 以後の主な研究としては, Conway [1899], Carus [1901], Audollent [1904] = *DT*, Preizendanz [1926], Preizendanz [1930], Griffiths / Barb [1952], Moraux [1960], Preisendanz [1972], Gager [1992], Ogden [1999], Bevilacqua [2012], Németh [2013a] などが挙げられる。小論で扱う原文は Wunsch [1898], Audollent [1904], Bevilacqua [2012] を基にした。
- (3) 前野弘志「セト呪詛板の図像分析」『西洋史学報』44 [2018] 1-32頁。
- (4) この本文テキストの出発点は $\Lambda\acute{o}(\\nu\omicron\varsigma)$ からである。ゲイジャーの読み方が間違っていたことについては, ゲイジャー [2015] の書評『史潮』新83 [2018] 78-84頁において論じた。
- (5) ST16A.14, ST16B.53, ST17.5, ST19.4, ST20A.[1], ST20B.[55], ST23.1, ST27.3, ST24.7, ST27.[10-11], ST28.1-2, ST28.1-2, ST29.[4], ST30A.[14-15], ST31.[8-9], ST32.[1-2]。
- (6) ST21.1, ST21.9, ST21.[27], ST21.58-59, ST22.3, ST22.[9], ST22.14, ST30A.[4], ST30A.14-15。
- (7) ST16B.53, ST17.5-6, ST20B.[55-56], ST21.[9], ST22.3, ST23.1-2, ST27.[3], ST27.[11], ST28.[2], ST28.[2], ST29.[5], ST30S.4, ST30A.[15], ST32.2-3。
- (8) ST19.4-5, ST21.[27], ST22.[14], ST31.9。
- (9) ST16A.14-15, ST24.7-8, ST36.1。
- (10) ST20A.1-2, ST21.1-2, ST21.59。
- (11) ST16A.15; ST17.6, ST18.[3], ST19.5, ST24.8, ST27.4, ST29.[5], ST30A.[2], ST30A.4-5, ST30A.15-16, ST32.3-4。
- (12) ST16B.53。
- (13) ST20A.2, ST20A.[56], ST21.2, ST21.[9], ST21.28, ST22.[14]。
- (14) ST22.3-4。
- (15) ST21.59-60, ST23.[2], ST28.[2-3]。
- (16) ST16A.16, ST16B.52, ST24.9-10。
- (17) ST16A.48-49, ST16A.52, ST16B.68, ST16B.72, ST17.43, ST19.[13-14] ($\delta\rho\kappa\acute{\iota}\zeta\omega$), ST20A.14-15, ST20A.[10-11], ST20B.70-71, ST21.2, ST21.11, ST21.15, ST21.16, ST21.23, ST21.43, ST22.20, ST22.26, ST22.42, ST22.43, ST22.56, ST23.[4], ST23.16, ST24.25, ST25.16, ST26.[19], ST27.12, ST27.[41], ST28.[9], ST31.4, ST31.14, ST31.36-37 ($\delta\rho\acute{\iota}\zeta\omicron$), ST32.[5], ST33.3, ST36.[4]。
- (18) ST17.10, ST17.13, ST22.28, ST28.21, ST29.7, ST29.22。
- (19) 古代ギリシア語は, アッティカ・イオニア方言群, アルカディア・キプロス方言群, アイオリス方言群, 西方方言群の四群に大別される (Christidis [2001], p.390)。西方方言群は更に, ドーリス方言群と北西方言群に細分される (*op.cit.*, p. 390)。一方, アッティカ・イオニア方言群とアルカディア・キプロス方言群は, 東方方言群とも呼ばれる (*op.cit.*, p. 390)。ドーリス方言は, ラコニア, メッセニア, クレタ, キュレナイア, ヘラクレア, ロドス, ドデカネス, メロス, テラ, アルゴリス, コリントス, メガラで使われた (*op.cit.*, p. 390-391)。

- (20) ドーリス方言の未来の語尾は, -σέω となる (Christidis [2001] p.449)。従って例えば, ποιέω の二人称複数の場合, ποιήσετε となり (アッティカ方言では, ποιήσετε), εε が母音融合して η となって, ποιήσητε となる。
- (21) [ἀ]π[ὸ τῆς ἡμέρας καὶ] ὥρας (ST23, 28-29) は大部分が復元である。ὥρας が最後に来る点においてパターンから外れているし, この呪詛板には ἀπό ταύ[τ]ης τῆς ἡμέρας καὶ ὥρας が認められるので (14), 2文字多くなるが, 復元は [ἀ]π[ὸ ταύτης τῆς ἡμέρας καὶ] ὥρας と改めるべきではないだろうか。
- (22) 志内訳「というのも我はそなたらを, 地の下で若いままに成長し, (黄道十二宮の) 周回を制止させるお方の力で呼び出したのだから」(ゲイジャー [2015] 77頁)。
- (23) Brashear [1995], p. 3591, s.v., μανε によると, „Mittag“ cf. myne, „Tag“, Abrasax I 169. CD, myne, p.172a によると, daily, every day。
- (24) Wunsch は ST20 の図像は掲載しているが^s (Wunsch [1898], S.23, S.28), ST21 の図像はそれと同じなので掲載していない。
- (25) Wunsch [1898], S.120; Audollent [1904], p.225 に基づく。
- (26) Δομνῖνος ὁ καὶ Ζύζυφος υἱὸς Βικεντίας ἡνίοχος [τοῦ ῥώσέου] と Δομνῖνος ὁ καὶ Ζύζυφος [Γύζυφος] υἱὸς Δηκεντίας ἡνίοχος は, 同一人物として④にまとめた。
- (27) 馭者の現役期間については, スター馭者たちの戦歴を記した碑文や墓碑から知ることが出来る。例えば, <いずれも 2世紀の例であるが, クレスケンスは13歳でデビューし22歳で死亡して9年間の選手生命を終えた (CIL, 6. 10050), フラウィウス・スコルプスはデビューの年は不明であるが27歳で死亡した (CIL, 6. 10048), ディオクレスは18歳でデビューし42歳で引退するまで24年の現役生活を全うすることが出来た (CIL, 6. 10048)> (DNP, Bd.2 [1997], Circus, Kol.1218; Willekes [2016], p.217)。
- (28) ① ST16A, 49-50; ST16B, 69; ST20B, 71-72; ST24, 25-27; ST31, 15-17, 37-41。
- (29) ② ST17, 14-16; ST20A, 11-13, 15-18; ST21, 2-3, 16-17, 43-45; ST22, 3-4, 20-21, 26-29, 43-44; ST26, 19; ST27, 13-15, 47-48; ST28, 10-12, 21-23; ST29, 23-26; ST30A, 28-29。ST20 は表面が^s②で裏面が^s①である。ST20B, 71-72 と ST26, 19 と ST31, 15-17 は, 一部が省略されている。
- (30) εἰκοσσεσ[sάρτην] は εἰκοσσεσάρτην の書き間違いだろう。

参考文献

- Audollent, A., (ed.), *Defixionum Tabellae quotquot innotuerunt tam in Graecis orientis quam in totius occidentis partibus praeter Atticas in Corpore Inscriptionum Atticarum edidas*, Albertus Fontemoing, Paris, [1904] = *DT*.
- Betz, H. D. (ed.), *The Greek Magical Papyri in Translation: Including the Demotic Spells*, Vol. one: Tetx, Second Ed., The University of Chicago Press, Chicago, London, [1992] = *GMP*.
- Bevilacqua, G., IX. 44-45. *Sethianorum Tabellae*, R. Friggeri, M. G. G. Cecere, G. L. Gregori (ed.), *Terme di Diocleziano: La collezione epigraphica*, Electa, [2012], p.602-610 = *TdD*.
- Bonnet, H., *Reallexikon der ägyptischen Religionsgeschichte*, Berlin, de Gruyter, [1952].
- Brashear, W. M., *The Magical Papyri: an Introduction and Survey; Annotated Bibliography (1928 - 1994)*, Wolfgang Haase (hrsg.), *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt (ANRW)*, Teil

- II: Principat, Band 18: Religion, 5. Teilband: Heidentum: Die religiösen Verhältnisse in den Provinzen (Forts.), Walter de Gruyter, Berlin / New York, [1995], S.3380–3684
- Carus, P., Abubis, Seth, and Christ. The Significance of the “Spott-Crucifix.” –The Religious Significance of the Ass. – The Lead Tablets of the Via Appia. With Illustrations from Egyptian and Roman Archaeology, *The Open Court*, Vol. XV. (No.2), No.537, Chicago, [1901], p.65–97.
- Christidis, A. -F., (ed.), *A History of Ancient Greek from the Beginning to Late Antiquity*, Cambridge University Press, [2001].
- Conway, R. S., Seth-Gnostic Curses Found in Rome: Review of Sethianische Verfluchungstafeln aus Rom by Richard Wünsch, *The Classical Review*, Vol.13, No.4, [1899], p.224–226.
- Daniel, R. W., F. Maltomini, *Supplementum Magicum*, I-II, Opladen, [1990–1992].
- de Rossi, G. B., Comunicazione nelle Adunanze dell' Instituto, gennaio 2, 1880, *Bullettino dell' Instituto di Corrispondenza Archeologica*, [1880], p.6–9.
- Gager, J. G., (ed.), *Curse Tablets and Binding Spells from the Ancient world*, New York, Oxford, Oxford University Press, [1992]=CT
- Griffiths, J. G., and A. A. Barb, Seth and Anubis?, *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Vol.22, No.3/4, [1959], p.367–371.
- Maltomini, F., I Papiri Greci, *Studi Classici e Orientali*, vol.29 [1980], sec. II, p.55–112.
- Matter, J., *Une excursion gnostique en Italie*, Strasbourg-Paris, [1852].
- Moraux, P., Une défixion judiciaire au Musée d'Istanbul, *Académie royale de Belgique, Collection des Lettres, Mémoires*, Collection in 80, 2. LIV, ii, Brussels, [1960].
- Németh, G., The Horse Head Demon, *Sylloge Epigraphica Barcinonensis*, XI, [2013a], p.153–162.
- Németh, G., *Supplementum Audollentianum*, Hungarian Polis Studies, Nr.20, Zaragoza – Budapest – Debrecen, [2013b].
- Ogden, D., Binding Spells: Curse Tablets and Voodoo Dolls in the Greek and Roman Worlds, Valerie Flint, Richard Gordon, Georg Luck, Daniel Ogden (eds.), *Witchcraft and Magic in Europe, Ancient Greece and Rome*, The Athlone Press, London, [1999], p.1–90.
- Preisendanz, K., *Akephalos, Der kopflose Gott*, Leipzig, [1926].
- Preisendanz, K., (hrsg.), *Papyri Graecae Magicae, Die griechischen Zauberpapyri*, Teubner, Leipzig, Stuttgart, Bd.I [1928, 1973], Bd.II [1931, 1974]. = PGM
- Preisendanz, K., Die griechischen und lateinischen Zaubertafeln, *Archiv für Papyrusforschung*, Bd.9, [1930], S.119–154.
- Preisendanz, K., „Fluchtafel (Defixion)“, *Reallexikon für Antike und Christentum*, Bd.VIII, [1972], S.1–29.
- Willekes, C., *The Horses in the Ancient World: From Bucephalus to Hippodrome*, I. B. Tauris, London / New York, [2016].
- Wünsch, R., (hrsg.), *Sethianische Verfluchungstafeln aus Rom*, Leipzig, B. G. Teubner, [1898] = ST.
ジョン・G・ゲイジャー 『古代世界の呪詛板と呪縛呪文』 志内一興訳、京都大学学術出版会 [2015]。
- 高津春繁 『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店 [1960]。
ディオゲネス・ラエルティオス 『ギリシア哲学者列伝』 加来彰俊訳、岩波文庫、上 [1984]、中 [1984]、下 [1994]。

セト呪詛板の本文テキスト構造分析——（前野）

中野定雄 / 中野里美 / 中野美代訳『プリニウスの博物誌』全3巻、雄山閣 [1986]。

プラトン『国家』藤沢令夫訳、岩波文庫、上・下 [2008]。

吉村作治（編）『古代エジプトを知る事典』東京堂出版 [2005]。

本研究はJSPS 科研費 JP26370859の助成を受けたものである。（平成26～28年度「古代ギリシア・ローマ世界における呪詛板の研究」課題番号26370859の成果の一部である）。

（広島大学大学院文学研究科）